富士正晴

たんぽぽの歌

河出書房新社

たんぽぽの歌

昭和三十六年十一月十日　印刷
昭和三十六年十一月十五日　発行

定価　三四〇円

著者　富士正晴

発行者　東京都千代田区神田小川町三の八　河出孝雄

印刷者　東京都千代田区飯田町一の二三　中内佐光

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
振替　東京一〇八〇二
電話東京（二九二）三七二一

製本：小泉製本　落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

織部雜記帳……三

ウス雜記帳……一三

たんぽぽの歌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

纖部雜記帳

一

利休は切腹した。茶頭の振舞いというよりは武将の振舞いである。それも大名の振舞いであろう。天下一の関白に切腹の命令を出させたということだけでも、茶頭としては出来すぎた振舞いだ。天下一のにこにこ顔の訳知りの関白秀吉をこれまでカンカンに怒らせたということは関白を茶頭にすぎぬ利休の座まで引きずり下ろしたことになる。利休の一族を皆殺しにし、利休の首を河原にさらしものにしたところで、関白の値打ちは下がるものではあっても上がりはせぬ。そこをあらかじめ見てとっての上での利休の数々の振舞いがあったか。堺の衆の役割はもうほぼ終って、博多の衆の役割がもうはじまっている。利休はほぼ終って、博多の宗湛の番が廻って来ている。それは利休も存じていることだ。だが、それは堺と博多との地の利によるもので、利休と宗湛との人物力量のちがいではない。堺の衆は京を収めるのに必要であった。利休の茶もまたそのために必要であった。利休はいわば堺のつまみであった。わかっていて利

休はそれが承知ならなんだか。茶好き、茶きちがいの利休は秀吉こそ、天下を利休の茶で征服するつまみと心得ていたに相違ない。関白の目が西へ向かって大きく傾かぬうちこそ、堺のつまみと天下のつまみが互いに快くつまみ合うていた。だが、博多のつまみに天下のつまみの手がのびかけ、博多のつまみもさり気なくつまみよいような形を示した。だが、関白は宗湛の茶を利休の茶ほどは買うてはおるまい。茶は朝鮮相手には役にも立たぬかもしれぬ。

堺のつまみは、天下のつまみがおのれの指からすべり出そうとするのが承知ならなんだのだろう。何の藤吉郎ずれがと昔を思い出すこともあっただろう。堺も天下も勘が人一倍働く。どちらも天下一だ。どちらかが折れねばうまく行く道理はない。茶で戦えば利休に利がある。それを天下はだいたい茶で戦う気であった。そこを利休は感じたかもしれぬ。いや、察したにきまっておる。何の所詮は切りとり強盗の武士ではないか、いっそ太刀でこいと利休は思うたのではあるまいか。強いて関白の目に余るよう振舞うた。殺されるとまで思うたかはわからぬが、殺さば殺せ、殺さばそちらの器量が落ちようとは思うていたであろう。関白はうまうまと最後には利休のわなにかかった。妙なわなをかけたものだ。天下一のひねくれ、いかにも、油濃い爺のやりそうなひねくれである。あの爺の好みの坊主くさい茶室の中でのみ、ねちねちとねり上げられて、にっちもさっちも行かなく煮えつまったひねくれのようだ。おそろしいほど冷静に、まるで悟りとやらいうもののような形にさえ、ひねくれている。太刀とらぬものとしては、

これより仕方なかったろう。天ッ晴れというてよい。だがまあ、小大名のおれから見ると、何やら天ッ晴れなだけつまらん気がすこしはしないでもないのだ。武士のように切腹した。堂々として立派であった。それはそれでよい。だが、切腹の立派さが茶人において何であるか。勇ましくて何になる。勇ましいことが淋しいばかりではないか。寿命まで生きて死ねばよかろうに、つい目の先であろうのに、後世の語り草を残してあわてて死んで何になろう。派手なことだ。

切腹の立派さなど荒涼とする。おれは茶室での利休の振舞いの立派さだけで、それだけでよかったと思う。最期が立派であったと人も言い、それを聞けばおれとても感に耐えぬようにそのことを利休の茶にひっかけて受け答えはする。本気でいう奴もあろう。お世辞もあろう。だが本気でいうている奴のほうが多い。前田利家も、細川忠興も、みな本気でそういうておるらしい。奴らは茶頭というのが何なのかを知らぬのであろう。茶頭とはまあ茶坊主の親方だ。物騒な商売をやる長袖だ。それは武士ではない。だが、おれみたいに大名武将で、茶頭の役割にむりやりはめこまれて難渋しているものもある。おやじが茶坊主上がりであったのが運の尽きというものだ。茶坊主のおやじを持ったことはおれの不幸のはじまりかもしれぬ。

まあそれはそれでおこう。言ってもはじまらぬ。関白にはさからえない。だが、利家や忠興が本気で利休の死の振舞いをひそかに褒めるのはよいが、秀吉までが、おれに向かって利休の最期を、いかにも本心を明かすというような御大層な顔つきで長々と褒めたのには呆れた。追

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いつめておいて殺して、死にざまが立派であったと褒めるとは風流なことである。

「さすが利休の茶は天下一よなあ。宗湛などやはり遙かに及ばぬところがある。鳥のまさに死なんとするや、その声は好しというが、最後に及んでのあの利休の偈、利休の歌の心地よきことはどうじゃ。かくありたいものよの。惜しい者を殺した。じゃが、死んでしもうても、利休は天下の太閤の茶道の第一等の師匠よ。わしは茶を点ずるごとに、利休をわしの手足の中に感ずることじゃろう。死なんでもよいのに、好んで死にやがって、わしのほうが怨んであの世へ化けて出たいくらいじゃわい」

えんえんと関白の愚痴はつづき、おれは腹の底でゆるやかに愕然とし、呆然とした。この男の頭の動きにはついて行きかねると思うと急に奇妙なおかしさが腹いっぱいにひろがり、それは顔にまでのぼってきて、頬をニヤニヤとゆるめた。だが、おれはゆるむものはゆるむままにしておいた。

「織部正、お前は泣きたい時、笑い顔になるような」と関白はおれの表情を鋭く見とがめて言った。「……無理もない。泣きとうもなるわ。笑いとうもなるわ。わしも苦い気持ちでおるよ。本当ぞ。嘘はない。何やら苦いものを飲みこんだような」

関白は喉に痰をつめたようにぜいぜいと息をひびかせた。顔が奇妙に赤くなった。

「わしは知っておる。お前と忠興が……淀で利休を見送ったことをな」

おれは別におどろくことはなかった。恐れもなかった。
「わしはまあ、お前と忠興とを天ッ晴れと思うたなあ。すこし気に入らんことではあるけれどな。うん、少々気に入らんがな。何か言わんか。黙ってばかりいずに」
「別に何も申し上げることはありませぬが……」
「ありませぬが？　何も無うても、何か喋れ。わしは天下一の者ぞ。命令にそむくことは許さん。まあ、こうじゃ。何か言え。うん？」
おれの口の中で舌がむっと円くなったような気がしてしばらくためらったが、おれは強いて舌をおしのばすような気味で、喋ってはまずそうに思われることをつい喋った。
「利休居士に死を賜わりました訳は……」
「ほう、その訳はどうじゃ？」
「いや、わたしめにはわかりかねますので、殿下におたずねを……」
「すると言うのか！」関白は厭な顔をした。「つまらぬことを、このわしに訊く奴があるか。馬鹿者め、手討ちにするぞ！　とも、ゆかんな。三成か玄以かに訊ねてみたらどうじゃ。わしは知らんよ」
「さらば、石田が利休に死を賜わったという奇怪なことになりましょうが」
「ふ。理屈を言うのう。織部正、お前、何やら利休に顔が似て来たような気がするぞ。利休

も理屈を言いおったわ。うるさげな理屈をな。わしに理屈を言うてもはじまるまい。わしは理屈は好かん」

「一旦こう口に出しました以上、殿下に知らんと申されても、不審がつのるばかりで」

「利休が不埒であったそうな」

「不埒？」

「そうよ。世間で噂が高かろうが、利休不埒の数々」

「噂ではわかり兼ね申す。殿下にじかに伺えば納得が行くことでござる」

「納得が行かんでもよかろう」

にべもなく関白は切って捨てるように言ったが、急に顔の相を崩してこちらの抗しかねる微笑を浮かべた。この笑いで多くの武将を味方にひきずりこんだのだ。

「まあ、利休不埒の噂を一つ一つ言うてみんか。巷ではどんなことを言うておるか？　うん？」

「大徳寺山門におのれの木像をかかげたこと」

「ふん。それがどうした。坊主が利休にべんちゃらしおっただけじゃ。そのべんちゃらに乗せられたのか乗ったのかはわしは知らん。何の気で山門におのれの像を乗せたかったのか利休のこころもわからんが、大方、よほどの男前と自惚れてかな？」

「いや、その下を通る者を土足で踏みつけるに等しいと、殿下がいたくお怒りに……」
「知らんなあ。……その次にどんな噂がある？」
「利休がはなはだしく財をむさぼり、怪し気な道具を法外な高値で諸大名に売りつけたのが、殿下の逆鱗に触れたと……」
「あほらしい。利休は堺の大商人ではないか。商人が財をむさぼって何の不思議がある。怪し気な道具というて、誰が怪し気と目利きしたか。目利きは利休に任せてよいことではないか。たいてい利休をそねんだものの申し分じゃろう。都ではこれをへんねしというようじゃな。もっと噂があろう」
「言うのに、はばかりがござりますが」
「はは ん。利休の娘お吟のことか」
「……」
「あれは胸が厚うて、尻のどっしり坐った娘であったわ。これなら、わしの子種が上々に育つ畑と思うた。何が不足で利休はああもきつうわしに肘鉄くわしおったか、わしにはわからん。何やらカッとしおった風に見えて、わしも面白うなかった。じゃが、年寄りというものは時々あのように、さほど訳がのうてもカッとするもんじゃ。わしにも覚えがある。気にしてはおらんぞ。だいたい・美しいというような女ではないわ。体が良いだけじゃ。あれは寄越しておれ

ば利休はまあわしの義理の父ということになろう。天下一の将軍に天下一の茶人のしゅうと、悪うはあるまいと思うたが、何やら気に入らなんだらしい。年取っての娘は目に入れても痛うないかして、傍から離すのが何としても厭じゃったのかもしれぬて。こちらはさほど執心ではなかった。女はこちらのくたびれるほど、すでにおるわ。ただ、畑が悪いのが多うてのう。とにかく、お吟のことでどうこう言うのは話を面白うするだけのことよ。イロのことは誰の耳にも入りやすい。のう、織部正」

「……」

「もうないか」

「思いきって申し上げれば、徳川家康殿毒害の茶事を居士が断わった故……」

「言うて良いことと悪いことがあると思わぬか、織部。まあ言ってみれば、わしの性分に合わぬ事柄であるな、毒害などは。わしの性分に合うは、毒あれば変じて薬とし、敵あればそれを味方にすることよ、のう」

「もう、申し上げることは尽き申しましたが」

「それでは、わしが利休に死を命じた訳がまったく無いことになるな。困ったことよのう」

関白秀吉はさも気の毒そうに笑ってみせた。幾分の嘲りがその中にあった。とともに、殺すほどでもなかったに惜しいことをという口惜しさも幾分かあるように見えた。おれを気の毒が

っていると同時に自分自身をも気の毒がっているようでもある。よく喋るくせに何も喋っていない気の知れぬ化け者に向かい合っているような気がした。

この風流な化け者が利休のようにただ一国なばかりの老人を執念深く追いつめて殺したのだということはっきりしている。けれど、その理由はまったくはっきりしない。淀で堺に追放される利休を見送った折、利休は秀吉について何一つ喋らなかった。もはや喋ることなど残っていない一種のすがすがしさと気味悪さがあった。すでに淀で船に乗るときに利休は心で切腹し了せていたのかもしれない。すると忠興とおれとは利休の死水を、利休の生きながらに取ったということになる。秀吉の言うところ、利休の言うところ、どちらも何一つ喋ってはいないに等しい。けれど、何かおれには感じられる。死期にほど近いことを知らずして知っている老人同士の執念深い争いの気配のみしかわからないのだが、気配がすでにあったのなら、石ころ一つにでも生死の理由はあって不思議ではない。生命をかけた争いとはそのようなものだ。けれど、このような陰湿な気配はこれまでの利休にも、もちろん秀吉にもみられなかったものである。

「利休の茶の湯では事足りぬ時がすでに来ておるな。利休の茶ではもうわしに仕えきれぬのよ。宗湛の茶でも駄目であろう。商人の茶の湯ではまかないきれぬ茶事が追々出てくるわ。わしは必ずそうして見せるよ。のう織部正、工夫がいるぞ、工夫が。商人の茶の湯ではもういか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com